

報告

沖縄県渡名喜村における学校、地域との連携による 思春期体験学習事業の現状と課題

神里 千鶴子¹⁾

渡名喜村は地理的特殊性から過疎化が進み閉鎖性が強く、又、少子高齢社会の中で交流範囲が制限されている。中学生は、高校進学のため沖縄本島での生活を余儀なくされ、自主自立が求められている。母子保健上の気になる点は、父親の育児への参加が少なく、乳幼児と中学生のふれあう機会が少ない等の声がある事である。

渡名喜村において、平成10年度および平成11年度に以下の目的で思春期体験学習事業を実施した。

- (1) 中学生が生命の尊さや保護者・地域住民への感謝の気持ちの大切さに気づき、思春期からの父性・母性の健全育成のための契機とする。
- (2) 保護者などの地域住民が子育てネットワークづくりについて考える機会にする。

体験学習後の中学生24人と保護者および地域住民36人を対象に行った質問紙による調査をもとに思春期体験学習事業の結果について検討したところ、中学生の体験学習後の感想から、乳幼児や家族、育児、親などに対する認識が変わってきていること、又、保護者および地域住民の感想から、家族や地域ぐるみでの子育て支援体制の必要性が示唆された。

キーワード：思春期、体験学習、中学生、島嶼、地域保健

緒言

渡名喜村は地理的特殊性から過疎化が進み閉鎖性が強く、又、少子高齢社会の中で交流範囲が制限されている。中学生は、高校進学のため沖縄本島での生活を余儀なくされ、自主自立が求められている。母子保健上の気になる点は、父親の育児への参加が少なく、乳幼児と中学生のふれあう機会が少ない等の声がある事である。

厚生省は平成3年から、市町村母子事業として「思春期における福祉体験学習」、「子どもにやさしい街づくり事業」および「児童環境づくり基盤整備事業」などを行ってきている。基盤整備事業の一つとして、「思春期における保健・福祉体験学習事業」が推進されている。

渡名喜村においては、平成10年度および平成11年度に(1) 中学生が生命の尊さや保護者・地域住民への感謝の気持ちの大切さに気づき、思春期からの父性・母性の健全育成のための契機とする、(2) 保護者などの地域住民が子育てネットワークづくりについて考える機会にする、という目的で思春期体験学習事業を実施した。体験学習後の中学生や保護者・地域住民を対象に行った質問紙による調査をもとに、思春期体験学習事業の結果について検討したので報告する。

渡名喜村の概況

著者は、平成10年4月から平成12年3月までの2年間、

保健婦未設置の渡名喜村において管轄保健所からの派遣で受託保健婦として勤務した。

渡名喜村は那覇市の北西海上58kmにあり、渡名喜島と島の西方約4kmにある無人島の入砂島(終戦直後から現在まで米軍の射爆撃場)の二つの島からなり、面積は3.74km²ある。西に久米島、北に粟国島、南東に慶良間諸島を臨み、これら離島群を結ぶ三角形の中心に位置している。

地形は、島の総面積の約7割を丘陵を主体とした山岳地域で占められ、島の中央部の平坦地一円に集落が形成されている。道から見ると、屋根が目の高さにあり、家の周囲に植えられたフクギが低い屋根を覆うようにうっそうと茂っている。集落の両側面が山に囲まれているため、台風襲来の際に山間を吹き抜ける強風から家は守られている。この地形を選んだ先人の知恵がいかされている。平成12年3月、家並みが国の重要伝統的建物群保存地区(街並み保存地区)に指定され、住民全体が喜びに沸いた。

渡名喜村の平成11年12月末の人口は494人(年少人口：79人：16%、生産年齢人口：223人：45%、高齢人口：192人：39%)で、年間出生数は過去8年間を見ると0~7人であり、出生率が1.4%で沖縄県平均13.4%を大きく下回っている。島は過疎化が進み農漁業に従事しているのは、高齢者であり、村の特産品としては、もちきびやアーサがある。しかし、規模が小さく生業として成立するまでには至っていない。米軍射爆撃場の入砂島を抱えながら零細な漁業と自給的な農業を営んでいるのが現

1) 沖縄県立看護大学

状である。

渡名喜村は、小学校（複式学級編成）、中学校は各1校で、高校はない。児童生徒の保護者は、役場職員を中心にした給与所得者がほとんどである。保護者の年齢構成から考えると、将来の児童生徒数の減少が懸念されるので、若者が定着するような島の歴史や文化、自然を利用した島興しが期待されている。

体験学習事業実施までの経過

渡名喜村の小中学校の児童生徒数は少なく、1クラス4～10人の小集団の学習であるため、マンツーマンに近い教育体制であり、教育環境には恵まれている。しかし、反面、離島の地域特殊性から閉鎖性が強く、人間関係における交流範囲が限られ、学習面において、切磋琢磨しつつも、主体性や積極性に欠ける一面は否めない現状である。更に、中学卒業と同時に殆どの子供達が、親元を離れ、那覇市など沖縄本島での生活を余儀なくされ、大集団の中へ入っていかねばならず、早い時期から自立が課せられている状況にある。

今回は特に中学卒業後、沖縄本島での高等学校へ入学したものの中途退学者が増える傾向にあるという事実に基づき、その原因として、地域から母子保健上の問題として上がり、又、地域で父親の育児への不参加傾向が高いという声も上がったことが課題であった。

事業は、平成8年に計画された母子保健事業年次計画を基に、単発的に計画されていた業務を見直し、親子遊ばせ方教室、育児講演会、思春期教室、乳幼児ふれあい体験学習、母子保健推進員の活用等について一つの関連した事業の中の組み立てにした。

そこで、体験学習事業について村受託保健婦と村母子保健事業担当職員が問題提起して、所轄の沖縄県南部保健所と共同計画で企画から加わり、ともに取り組んでいった。その後、村教育委員会を通じて思春期体験学習事業を学校に話を持ちかけたのは、平成10年度の4月であった。この時期は既に新しい学年が始まり、この事業を学校の教科に取り組むのが困難な様子であったが、事業目的が学校の思いと一致し、話を具体化することに決まった。実施する対象学年に関しては、中学2年生は受験もなく、体験学習の意義も十分に汲み取り、将来につなげていけるだろうとの考えから中学2年生に決定した。しかし、平成10年度から始まったため、学校側からの要望で中学3年生にも機会を与えてほしいとのことで初年度は中学3年生も対象とした。平成11年度は学校側の年間計画作成に合わせて、学校側と平成11年の2月に調整したため、スムーズに計画できた。当初の計画通り中学2年生を対象に行った。本事業は、計画から実施まで学校

側からは学校長を始めとして、主に中学校を担当している教頭も入り学級担任と養護教諭、家庭科教諭および空き時間の教諭が担当することになった。実施までの事前打ち合わせでさまざまな問題について保健所、村役場担当課課長以下職員間、村教育委員会、学校関係者、母子保健推進員など各関係機関との話し合いが持たれた。そして、思春期体験学習の各回毎に反省会を持った。

研究方法

1. 対象

平成10年度は中学2年生計6人（男子4人、女子2人）、中学3年生計6人（男子4人、女子2人）の合計12人である。保護者および地域住民が21人である。

平成11年度は中学2年生計12人（男子7人、女子5人）である。保護者および地域住民が15人である。

2. 方法

中学生には、思春期における体験学習を、第1回目～第2回目の内容で実施した〔表1 (1)〕。体験学習前に事前学習を行い、アンケート調査は体験学習後に実施した。24人の中学生の自由記載の内容を「生命の尊さ」「保護者・地域住民への感謝の気持ち」「父性の育成」「母性の育成」に関する言葉に分類した。第3回目は保護者および地域住民に育児講演会を行い〔表1 (2)〕、その後にアンケート調査を実施した。保護者および地域住民36人のアンケート調査から所感を分析した。

結果と考察

中学生を対象とした第1回目と第2回目の体験学習実施後のアンケート結果は（表2）の通りだった。参加した中学生24人のアンケート結果を項目毎に分けて、類似文をまとめると17の感想に分類できた。「生命の尊さ」が3人、「保護者・地域住民への感謝の気持ち」が4人、「父性の育成」が2人、「母性の育成」が2人であった。「その他」には体験学習ができて「よかった」「ためになった」「勉強になった」「今後もこういう機会を与えてほしい」という肯定的な結果が見られた。中学生を対象にした他の研究でも体験後の感想で「緊張した」「泣かれて困った」などのマイナスイメージで記載しているものの、「良かった」「楽しかった」などの感想と併記されたものが多かったと報告されている^{1) 4)}。小学6年生⁵⁾や高校生^{4) 6)}や大学生⁷⁾を対象にした研究にも同様な報告があり、否定的な結果は見られなかった。

中学生の体験学習後の感想を分析すると、乳幼児や家族、育児、親などに対する認識が変わってきている事が明らかになった。平成6～8年度厚生省の「思春期体験学習の評価に関する研究」では、20歳台の男女で、赤ちゃん

表1 (1) 思春期における体験学習事業のプログラム

| 回数 | 内容 | スタッフ |
|------|--|--|
| | <p><事前学習> 思春期における保健・福祉体験学習事前調査： (自分が生まれた時の様子) (その時の親の気持ち) (生まれた時の様子・親の気持ちを聞いての感想) を家族で話しあって生徒に作文を書いてもらう。保護者には体験学習をする意味を文書で説明する。</p> | クラス担任 家庭科教諭 養護教諭 |
| 第1回目 | (1) オリエンテーション.....司会：母子担当 (2) 民生課課長挨拶 (3) 学校長挨拶 (4) ビデオ鑑賞 「妊娠と出産」 (17分) (5) 講演会 『愛するってどういうこと?』 講師：産婦人科婦長 (6) 質疑・応答及びまとめ (7) アンケート記入 | 母子担当 民生課課長 母子保健推進員 保健婦 学校長 教頭 クラス担任 家庭科教諭 養護教諭 |
| 第2回目 | (1) オリエンテーション.....司会：母子担当 ・体験学習の目的等事業の説明 民生課課長 ・体験時の注意事項及び乳幼児の発達 保健婦 ・乳幼児の遊ばせ方 幼稚園教諭 (2) ふれあい体験学習 (3) まとめ (4) アンケート記入 | 母子担当 民生課課長 母子保健推進員 保健婦 幼稚園教諭 クラス担任 家庭科教諭 養護教諭 |

表1 (2) 保護者および地域住民への育児講演会

| 回数 | 内容 | スタッフ |
|------|---|--|
| 第3回目 | 司会：母子担当 (1) 村助役挨拶 (2) 乳幼児や小中学生の保護者や地域住民を対象にして、体験学習の目的等事業の説明 民生課課長 (3) 中学生のアンケート結果の内容を説明 保健婦 (4) 子育てを地域全体で考えよう 育児講演会 『思春期の子への関わり方』 講師：国立琉球大学教育学部教授 (5) P T A会長謝辞 (6) 小中学校長謝辞 (7) 講演終了後の意見交換及びまとめ (8) アンケート記入 | 母子担当 民生課課長 村助役 母子保健推進員 保健婦 学校長 教頭 幼稚園教諭 クラス担任 家庭科教諭 養護教諭 |

んのふれあい体験学習を経験した人と、してない人を対象に認識を調査している。その結果、体験学習経験者は、赤ちゃんや育児に対して肯定的かつ積極的であることと、結婚年齢にある人たちにも、児童生徒の時に経験した赤

ちゃんとのふれあい体験は、生命の尊さや父性・母性の涵養に影響を残していると報告している⁸⁾。今回の体験学習も彼等の将来に良い影響を及ぼすものと推測される。次に、育児講演会後の保護者や地域住民へのアンケー

表2 中学生の体験学習実施後の感想

| 項目 | 中学生の感想 |
|------------------|--|
| 生命の尊さ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 生命の尊さというものをつくづくと感じる2回の体験でした。これからはいろいろな体験がありますが、「命」というものを大切に、将来を担う子供達をたくましく育てたい。 ・ この体験学習を通して愛と生命についてわかりました。 ・ 命の大切さがわかりました。 |
| 保護者・地域住民への感謝の気持ち | <ul style="list-style-type: none"> ・ この体験学習を通して親というのがわかりました。子供にとっては親というのは大事なもののなのです。これから親になると思いますが、子供には明るくふれあいたいと思います。 ・ 自分が生まれてから一度も親の苦労なんてとても考えたことがなかった。これからは少しでも面倒をかけないようにしたい。 ・ この体験学習を通して親の大変さがわかった。この体験を親になったら生かそうと思った。 ・ 何回かふれあい体験学習をして楽しかった。親って本当に大変だなあと思った。 |
| 父性の育成 | <ul style="list-style-type: none"> ・ バンパースを取り替えたり、抱き方を体験してためになった。子供ってかわいい。 ・ この体験学習を通して子供のかawaiiさ、おもしろさがわかった。 |
| 母性の育成 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 赤ちゃんはかわいいと思った。自分も大人になったらかわいい赤ちゃんを生みたいと思った。 ・ 私は前から子供や赤ちゃんがすごく好きだったから今日の企画はうれしかった。 |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回だけでなく、来年もまたやる事に意義があり、赤ちゃんとの交流を深める大切な機会になると思います。このような体験ができて本当によかったです。 ・ ビデオを見たり、赤ちゃんとふれあったり、いろいろな体験を通して、とてもためになりました。また、このような機会があれば参加してみたいです。 ・ 今まで全く知らなかったことを知ることができて本当によかった。 ・ 近くに小さい子はたくさんいるが、知らない事もあったのでよかった。いろいろな事がたくさん学べ、たくさんのことをして遊べて楽しかった。 ・ 幼稚園児と遊ぶのがあまりないのでこのような学習は、これからはあればいいと思う。 ・ あまり、小さい子と遊んだり、抱っこしたりする事がなかったからいい経験だった。 |

ト結果では、「親子の話し合い、家族愛の伝え方が中学生の子供達に特に重要だ」「思春期の子供達の心の変化に対する父母の関わりがいかに大切であるかしみじみ感じた」「親としてやるべき事は何か示唆した内容だと思う」「思春期の子供の心理的、身体的なことがわかりやすく説明され、日常生活での会話や関わり方が参考になった。夫婦で力を合わせて子育てに励んでいけたらと思う」「父親の参加を工夫して、両親で子育てをする大切さを理解してほしい」などの意見・感想があった。

平成10年度の沖縄県福祉保健部健康増進課資料によると、19市町村で思春期における保健・福祉事業が実施されているが中学生のふれあい体験学習とともに保護者や

地域住民を含めた育児講演会までの一貫した計画で実施されている市町村は県内では渡名喜村しかない^{9) - 11)}。

今日、青少年による殺人など数多くの社会問題が浮き彫りになってきている。教育の現場と保健行政の現場との連携の難しさがよく言われている^{12) - 13)}。子供達の健全育成には家庭や学校のみでなくて、地域ぐるみでネットワーク化して妊娠・出産、乳幼児、学童、思春期へと一貫した保健サービスの提供がはかれるような保健・医療・福祉・学校関係者の綿密な連携が必要であり、連携した活動体制を地域のシステムとして定着させることが望まれる。

おわりに

乳幼児に接する機会の少ない中学生が、思春期体験学習を通して、赤ちゃんを抱いたり母親との関わりを観察して、乳幼児の「かわいらしさ」や「おもしろさ」を知ることができたことがわかる。「自分も大人になったらかわいい赤ちゃんを生みたい」などの感想が述べられ母性の気づきや芽生えが推測された。これらの結果は沖縄県竹富町の思春期教室の結果と類似する¹¹⁾。又、保護者や地域住民の意見や感想からみると、育児に悩む父親の参加が見られたことなど育児講演会の場は有意義であったと言える。渡名喜村において思春期体験学習事業を継続して実施していくことの必要性を認識した。

今後の課題として、思春期体験学習事業の対象を中学2・3年生からすべての中学生に行うことや同一対象者を縦断的に追跡する方法を検討する必要がある。又、地域住民へ思春期体験学習事業の意義を理解させて、育児講演会への参加者を増やす方法を考慮すべきである。今後このような事業を継続的にいき、子育てネットワークを広げる機会になればよいと考えている。

最後に本事業の企画からともに賛同し実施した渡名喜村役場の比嘉茂義民生課課長ほか職員各位、渡名喜村後方支援保健婦の現在宮古保健所の大城千代子氏、中央保健所の仲間敬子氏および事業に協力して下さった渡名喜村幼小中学校関係者各位、体験学習に参加しました調査に協力して下さった中学生や地域住民の皆様に対して感謝の意を表す。

文 献

- 1) 前川尚美, 他: わが国におけるふれあい体験学習の実施状況調査, 日本公衆衛生雑誌, 41(10), 808, 1994.
- 2) 田村須賀子, 他: 中学生の感想文からみた「赤ちゃんとのふれあい体験学習」の評価, 北陸公衆衛生学会誌, 8, 22(2), 1995.
- 3) 吉村尚美, 他: 山間部における中学生のふれあい体験学習を実施して, 地域医療 増刊号, 37, 777-779, 1998.
- 4) 石川清美, 他: 中高校生の赤ちゃんに対する感情の

変化 ふれあい体験学習による影響, 思春期学, 83, 1999.

- 5) 須山梅子, 他: 事前学習を試みた小学生のふれあい体験学習, 日本公衆衛生雑誌, 44(10), 871, 1997.
- 6) 山本祐子, 他: 思春期保健事業と高校家庭科授業とのリンケージ アンケート調査による体験学習についての一考察, 日本公衆衛生雑誌, 41(10), 851, 1994.
- 7) 岡美恵子, 他: 乳幼児との接触体験と母性意識について 大学生のアンケート調査より, 思春期学, 82, 1999.
- 8) 清水凡生: 赤ちゃんとのふれあい体験 思春期の人々への影響, 生活教育, 42(8), 28-31, 1998-8.
- 9) 沖縄県福祉保健部健康増進課: 市町村母子保健事業実施状況 (思春期における保健・福祉体験学習事業), 64-66, 1999.
- 10) 沖縄県福祉保健部健康増進課: 市町村母子保健事業平成10年度ヒヤリング実績 (思春期における保健・福祉体験学習事業)
- 11) 山上かぐみ, 他: 竹富町における思春期教室への取り組み, 第48回保健婦 (士) 業務研究発表会, 15-18, 1999.
- 12) 梅田勝: 新しい時代の小児保健活動 地域小児保健活動の展開 思春期における保健・福祉体験学習和歌山県における乳児健診体験学習の試み, 小児科臨床 増刊号, 50, 1522-1526, 1997.
- 13) 大浜淳子, 他: 学校・地域との連携による思春期保健活動, 第47回保健婦 (士) 業務研究発表収録, 18-23, 1998.

資 料

- 厚生省: 平成6~8年度厚生省「思春期体験学習の評価に関する研究」報告書
沖縄県渡名喜村: となき村勢要覧, 1999
沖縄県渡名喜小中学校: 平成11年度教育計画, 1999
沖縄看護協会: 平成12年度職能集会検討資料, 2000

The Present Situation and Issues of Adolescence Learning Project Carried out in Cooperation with a school and an area in Tonaki Village, Okinawa, Japan

Kamizato Chizuko, R.N.,P.H.N.,M.H.S.¹⁾

The process of depopulation is progressing rapidly in Tonaki village due largely to its geographical location resulting in a closed society and limited interaction among villagers in an increasingly aging society.

Junior high school students are forced to live on Okinawa island in order to prepare themselves for senior high school entrance examination and, as a result, independent autonomy is demanded of them. I am concerned about the voice heard about scarcity of opportunities for direct contact between infants and junior high school students.

In Tonaki village, I carried out the adolescence experience learning project for the following purpose in 1998 and 1999.

1. Junior high school students became aware of the holiness of life and healthy upbringing toward parenthood.
2. Affording opportunities among area inhabitants to think about an organization network for successful child upbringing.

I distributed questionnaires to 24 junior high school students, who finished the learning project, 36 patronesses and area inhabitants. The examination of questionnaires revealed the following: There have been marked change in recognition among junior high school students, who underwent the learning in terms of acquiring higher awareness of infants, families, child care and parents. From the impression gained from patroness and area inhabitants, the need for support system for family and the area as a whole is strongly felt.

Key words: Adolescence, Experience learning, Junior high school students, Islands, Area health

1) Okinawa Prefectural College of Nursing